シンポジウム 3：2025 年 2050 年 問題を徹底討論する

－我が国の未来予想図を描く－

演題名	2050 年を乗り切るために必要なのは地域包括ケアシステムである

概要

地域包括ケアシステムとは、介護が必要になっても、住み慣れた地域で自立した生活を送ることができるよう、住まいを中心に医療、介護、予防、生活支援サービスを包括的かつ継続的に提供するシステムである。

地域包括ケアシステムに必要なものは、「地域性」「包括性」「循環性」である。「地域性」とはサービスが地域に根ざしていることであり、「包括性」とは医療と介護が一体的に提供されることを指し、「循環性」とは在宅～医療～介護～在宅という形で、サービスが急性期医療から慢性期医療、介護や在宅までの各ステージで連続的かつシームレスに提供されることを指す。地域包括ケアは川下から川上を眺める生活者の視点に立つ。

地域包括ケアシステムの構築には、医療提供体制の再構築が必要である。急性期医療は、地域包括ケアを構成する重要な一部である。病院の機能分化は必然であり、同時に連携が不可欠である。病院の再編は、入院医療のみならず、医師・看護師需給や診療所経営にも大きな影響を与える。このため、各地域の実情を反映した医療・介護ビジョンを作成する必要があり、各病院はそれぞれの経営戦略を策定する必要がある。

21 世紀には、昼間人口が増大し、通勤者が減少する。超少子高齢社会では「近いこと」「近接している」ことが再び価値を持つ。首都圏など大都市では高齢者数が爆発的に増加し、救急医療では「社会で共有するトリアージ」が必要となる。また、高齢者が大都市から地方に戻り、高齢者住宅とサービス機関が近接したコンパクトシティで暮らすというスタイルを作っていくことも重要である。生活を支える在宅医療・介護サービスや、安心して相談できるかかりつけ医が重要となる。

地域包括ケアの構築には医師のリーダーシップが重要である。継続的なケア会議の成立や顔の見える関係の構築のために医師はその責任を果たさなければならない。医療・介護分野における顔の見える関係をつくることが、安心と信頼の基盤を作ることにつながる。

フリーアクセスの我が国では、地域包括ケアを「作るのが望ましい」のではなく、「必ず作らなければならない」。地域包括ケアをつくるのにはいろいろな方法がある。自分の地域にあった方法で地域包括ケアシステムを作っていく必要がある。